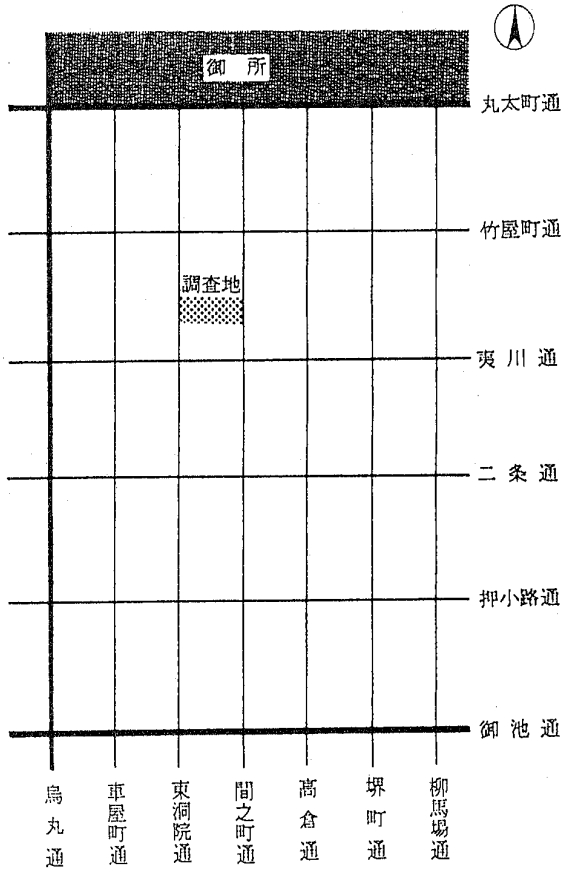
元京都市立竹間小学校跡地
発掘調査見学会資料

－ 江戸時代の町家跡 －



1998年３月14日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

元京都市立竹間小学校跡地発掘調査見学会資料

場　　所　京都市中京区間之町通竹屋町下る楠町
　　東洞院通竹屋町下る三本木五町目
期　　間　1997年10月29日～継続中
調査面積　約1300㎡
調査主体　(財)京都市埋蔵文化財研究所

1．発掘調査をした理由

現在の京都の市街地は、延暦(えんりゃく)13年（794）に長岡京から移ってきた首都「平安京」に始まり、そこから1200年にわたり連綿と発展してきた都市です。現在もなお賑わいを保ち、発展しつづけている点で、京都は日本で最も古い歴史を持つ都市と言えます。先頃まで竹間小学校が建っていたこの場所は、平安京の左京（東側半分）二条四坊三町という地番にあたります。平安京の範囲の地下には、都市に暮らした人々の1200年間の暮らしの痕跡が遺跡となって残っています。

この場所に、幼児教育センターと統合幼稚園が建てられることになり、やむなく地下の遺跡が壊れてしまうことになりました。そこで、昔の人々の生活の跡を記録に残し、現在や後世の人々へ伝えるために、発掘調査を行なっているのです。

2．現在までの調査の経過

この場所は、明治２年に開校された竹間小学校のおかげで、遺跡がとても良く保存されています。とりわけ小学校の運動場があった東洞院通側は、現代の大きな建築工事をまぬがれているため、浅い所にあって通常は破壊されていることが多い江戸時代の遺跡がそのまま残っていました。

現在の地面より約１m下までパワーショベルで掘り下げたところから調査を開始しました。この深さは江戸時代中期（18世紀）の地面（＝第１面）で、１月の末まで調査を行ないました。現在は、これより人力でさらに20cmから50cm掘り下げて（＝第２面）、江戸時代前期（17世紀）のさまざまな遺構を調査しているところです。

3．検出した江戸時代遺構

京都の一般的な庶民の住宅は、間口が狭く奥行の深い「町家(まちや)」という独特な空間を形つくっています。今回の発掘調査で見つかったのは、このような町家の遺構です。

第１面では、江戸時代中期から後期（18世紀中頃～19世紀）の町家跡を、東洞院通に面して７軒、間之町通に面して５軒の計12軒分が見つかりました。東洞院側の町家と間之町

側の町家は南北方向の区画溝で東西に区画されています。この溝には生活排水や雨水を流す働きもあります。各町家は通りに面した建物部分とウラニワ部分に大きく分かれます。建物部分では、柱の礎石、竈と井戸を設置したトオリニワ（＝土間）、穴蔵（＝金品等を火災による焼失から守るために地下に築かれた収納庫）などが見つかりました。ウラニワ部分では便所と思われる遺構やゴミ穴などがありました。上記の12軒のうち４軒の町家では、奥の部分に土蔵跡がありました。また、元治大火（1864）と天明大火（1788）で焼失した町家建物の瓦や土壁等の廃材を処理した大規模なゴミ穴を多数発見しています。

第２面では、江戸時代前期から中期はじめ（17世紀中頃～18世紀初頭）の町家跡が見つかりました。現在までに、第１面の町家とほぼ重なり合う状態で７軒分の町家を調査しました。明確な土蔵跡が確認できないことなどを除くと、町家の構は第１面の町家遺構と同様ですが、第１面より遺構の残存状態が良好で、建物の間取や上屋の構造まで復元できる可能性があります。また、宝永大火（1708）の痕跡と思われる焼灰の拡がりは確認できますが、大火で焼けた瓦や壁土が出土しないことから、この時期の町家建物は厚い土壁のない、板葺屋根の簡素なつくりであったと推測できます。

４．出土した遺物

出土遺物は、土器や陶磁器類が中心です。これらには、皿（灯明皿）、焙烙、火舎、火消壷などの日用品や碗、皿、鉢などの食器あるいは、焼塩壷、花塩壷などの調味料入れなどがあります。また、壷、甕などの貯蔵用の器やでんぼ、つぼつぼなどの縁起物の器もあります。これらのうち素焼きのままの土器は、京都の近郊で作られたものです。また陶磁器類は、肥前、丹波、堺、京、信楽、美濃、瀬戸など各地のものが出土しています。この他、朝鮮、中国、ベトナムからの外国産のものも出土しています。

器以外の土製品には人形や玩具があります。人物や動物をかたどった伏見人形やママゴト遊びの道具であるミニチュア土器、泥メンコ等が出土しています。また、珍しい遺物としては、組紐のオモリがあります。

この他、銭貨（寛永通寶）、砥石、硯、石臼等の石製品、煙管、飾金具等の銅製品、坩堝などの銅製品の鋳造に関連する遺物、食用の貝の殻や魚の骨などがあります。

５．発掘資料の意義

近世京都の町家遺構がここまで良好に検出された例はこれまでありません。この遺跡の調査と研究を進めることによって、三本木五町目（江戸時代前期までの町名は「井筒屋町」）と楠町（江戸時代中期までの町名は「和泉町」）の昔の様子が明らかになるばかりでなく、京都の伝統的な都市景観の形成を考えるうえでの手掛かりになるでしょう。

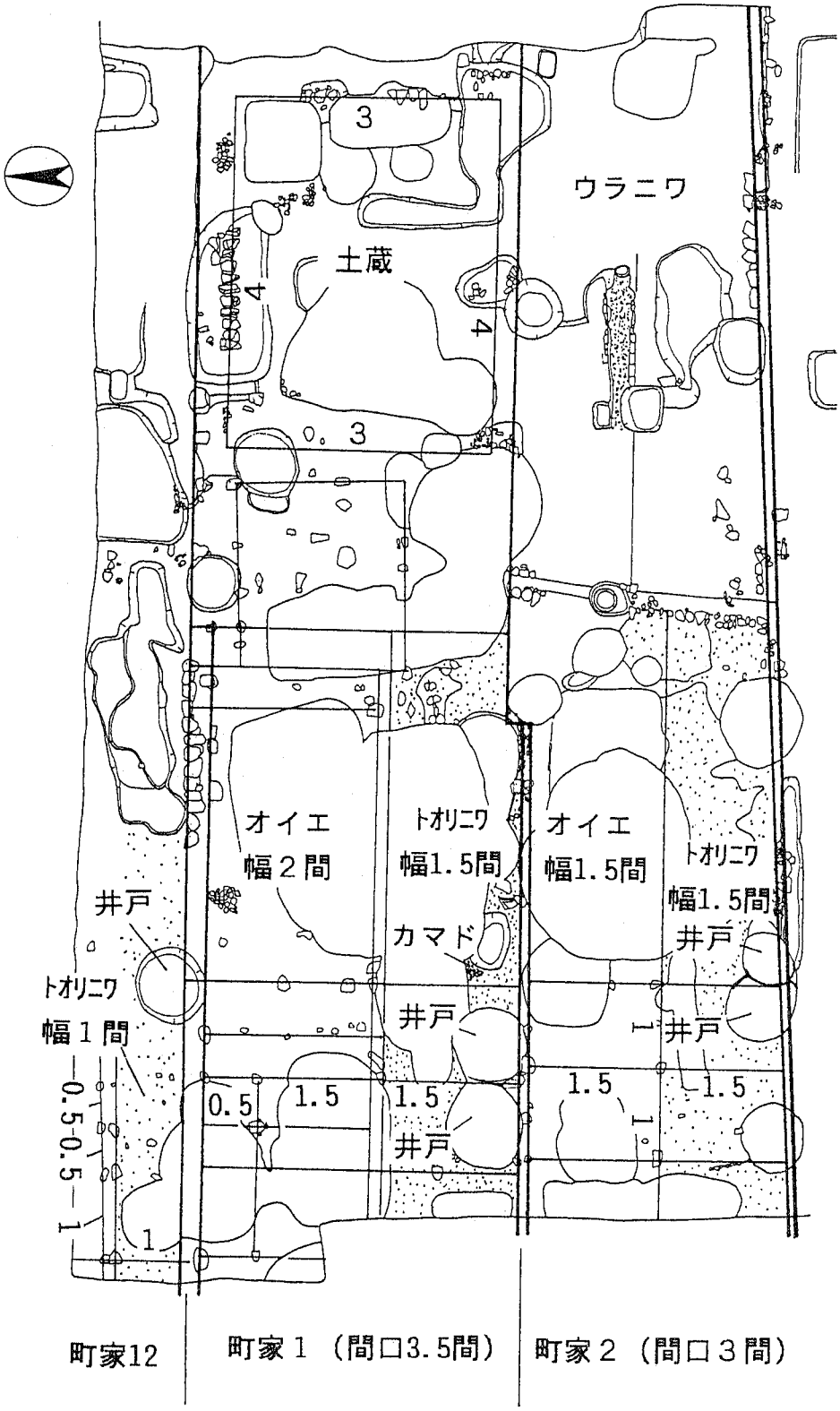


図１　第２面の町家１と町家２（１間は京間＝６尺５寸で復元）

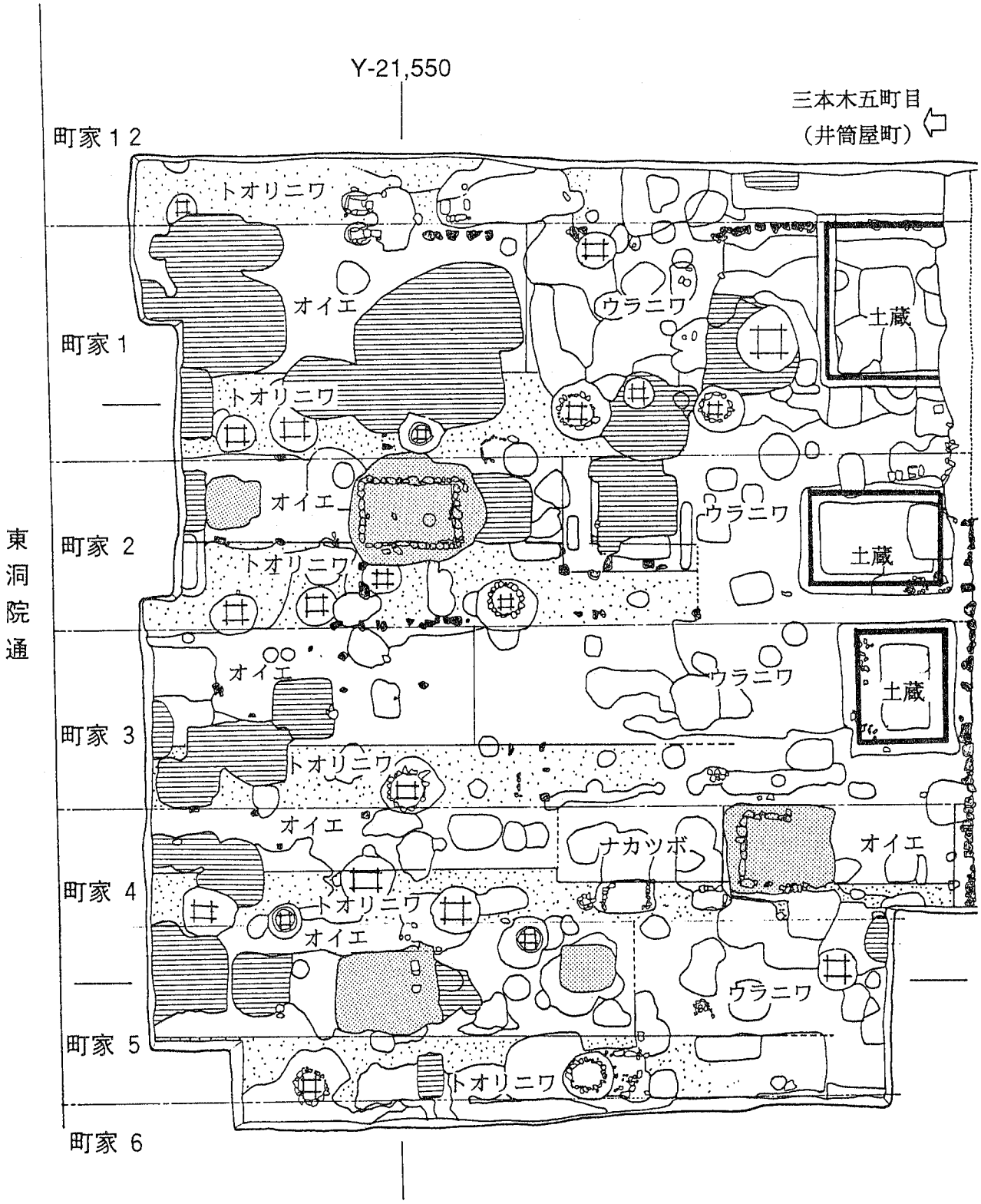
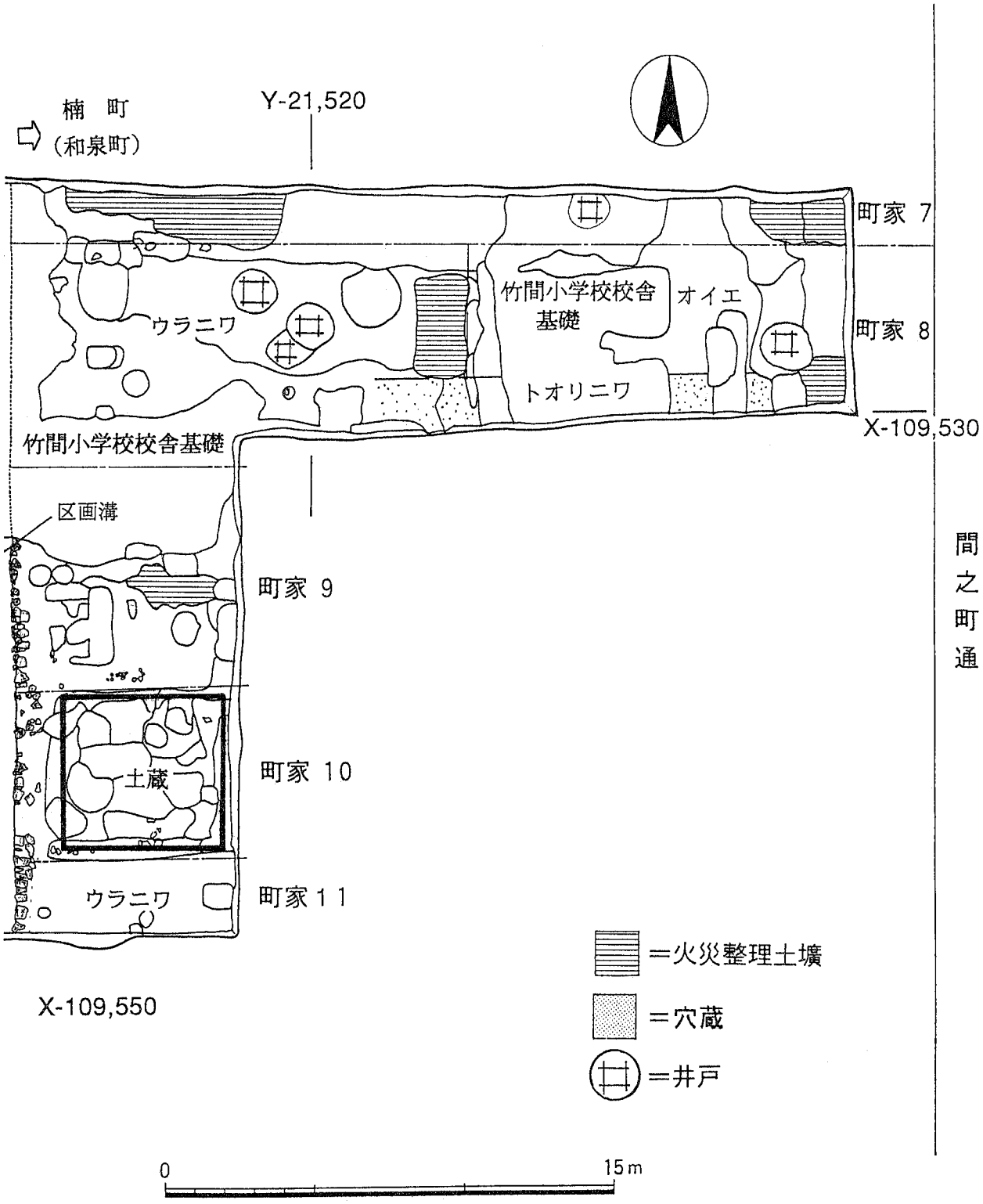


図２　第１面の遺構全体図（１：200）


楠 町
(和泉町)
Y-21,520
町家 7
竹間小学校校舎
基礎
オイエ
ウラニワ
町家 8
トオリニワ
X-109,530
竹間小学校校舎基礎
区画溝
間之町通
町家 9
土蔵
町家 10
ウラニワ
町家 11
X-109,550
=火災整理土壙
=穴蔵
=井戸
0
15m

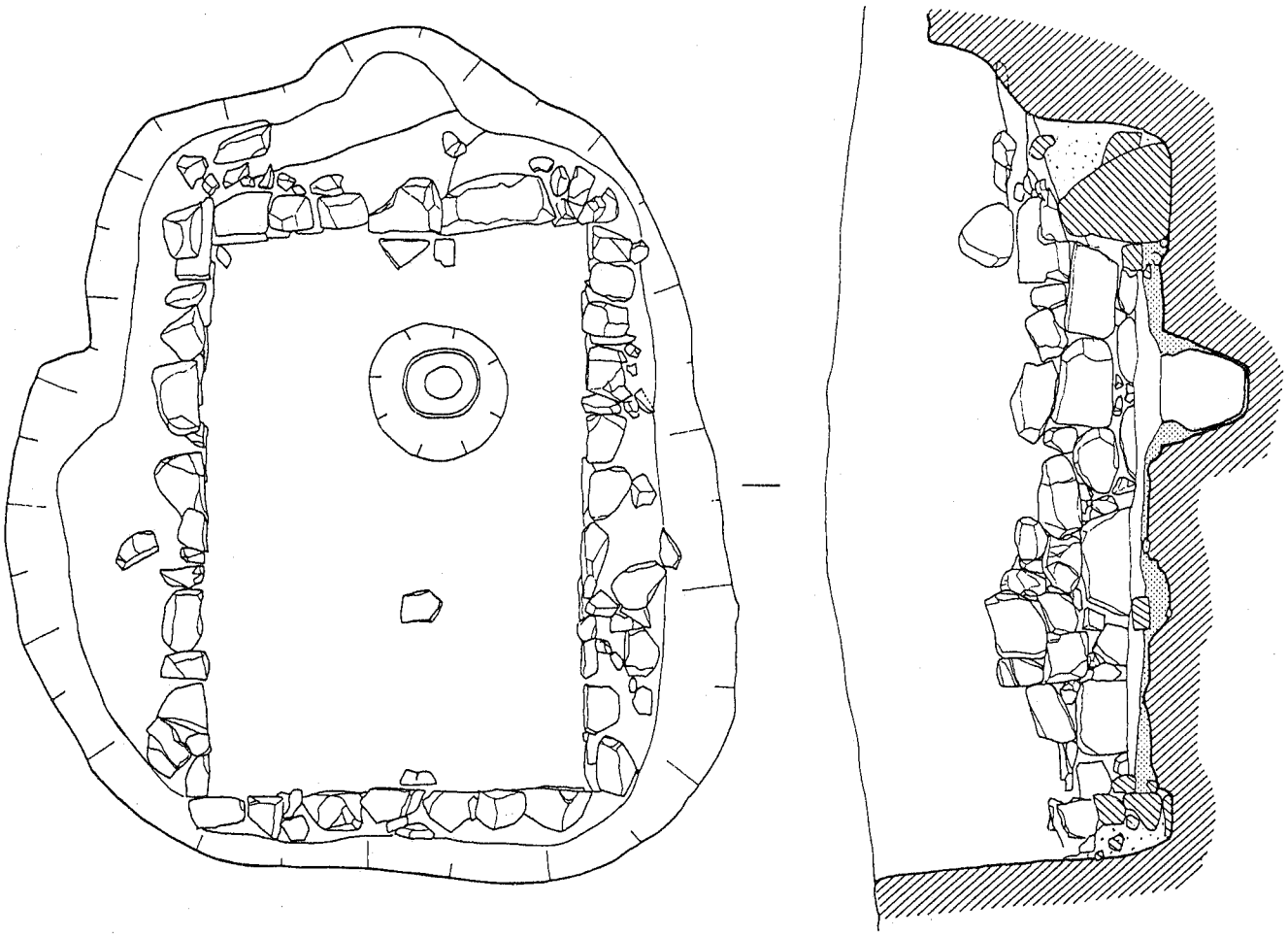


図３　第１面町家２の穴蔵平面図・断面図（１：40）

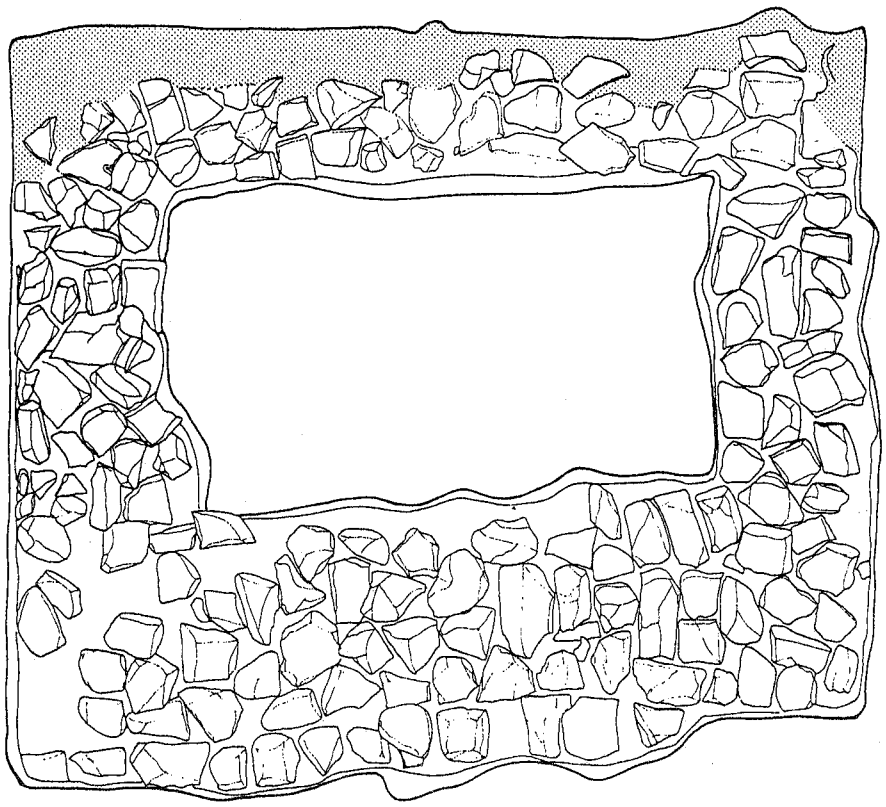


図４　第１面町家３の土蔵平面図（１：40）

写真１　第１面全景（北東から）

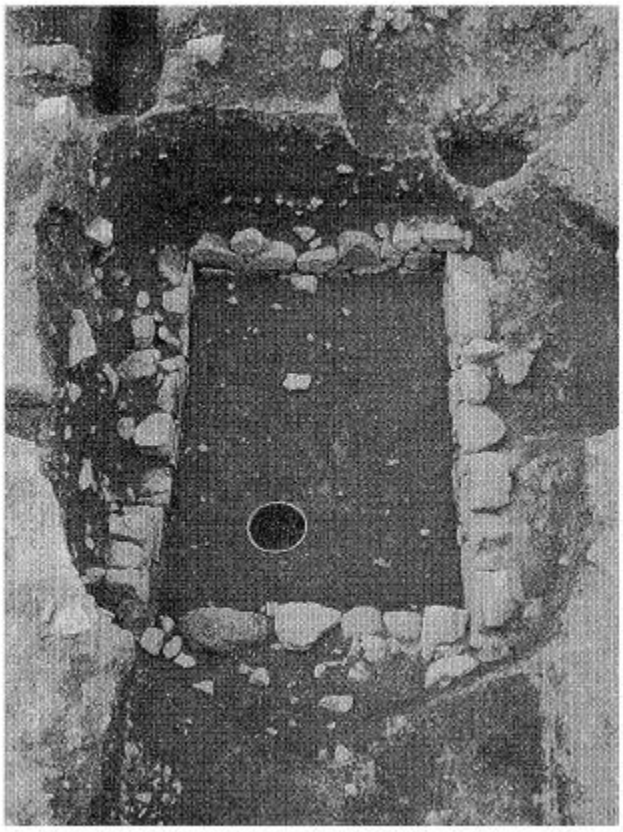


写真２　第１面町家２の穴蔵（東から）

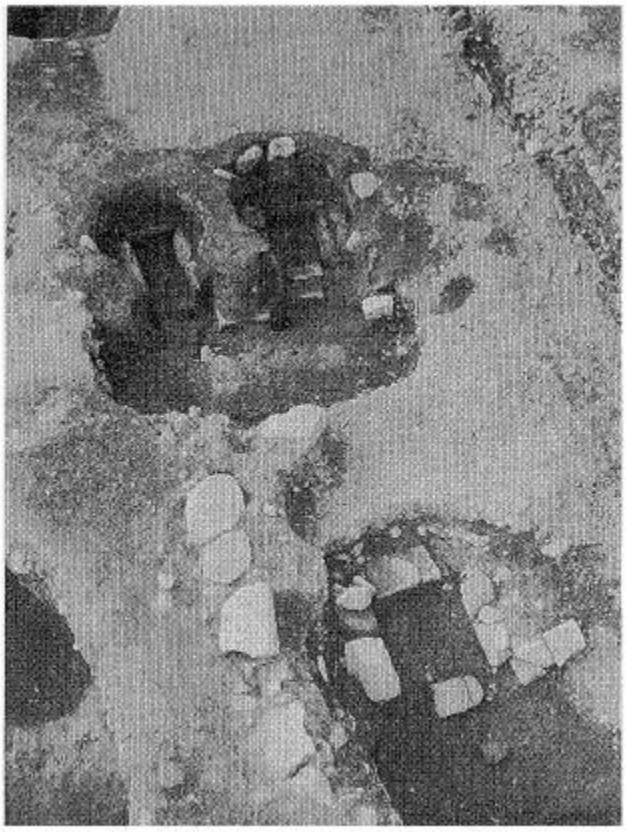


写真３　第１面町家１の竈（東から）

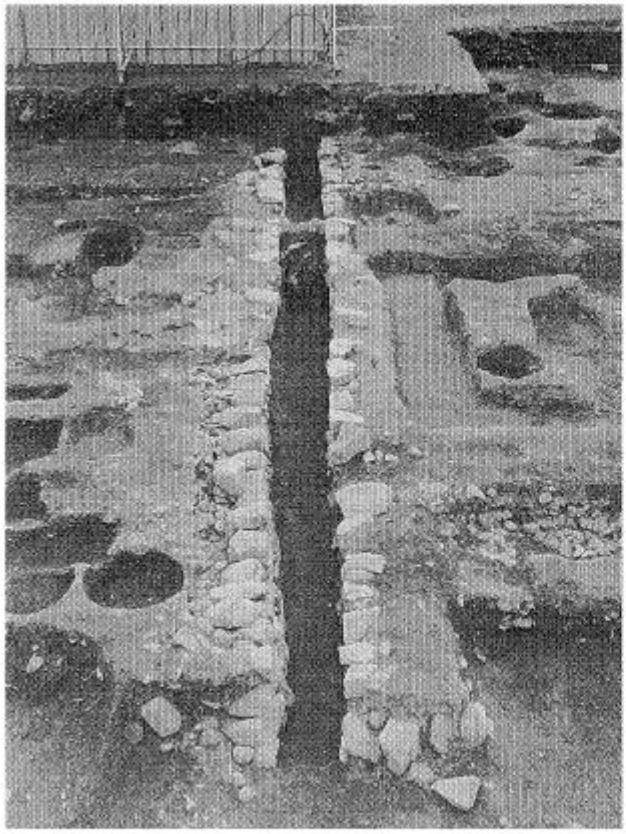


写真４　第１面の区画溝（北から）

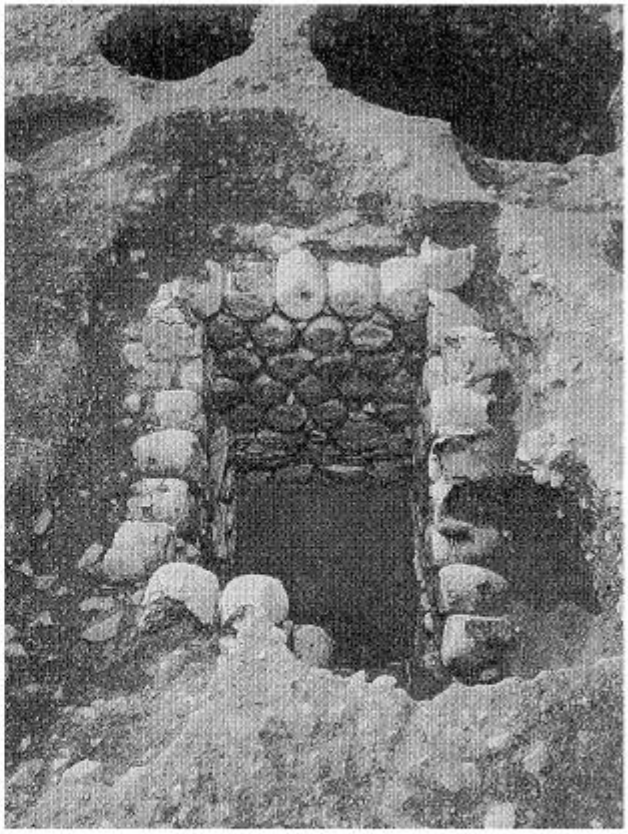
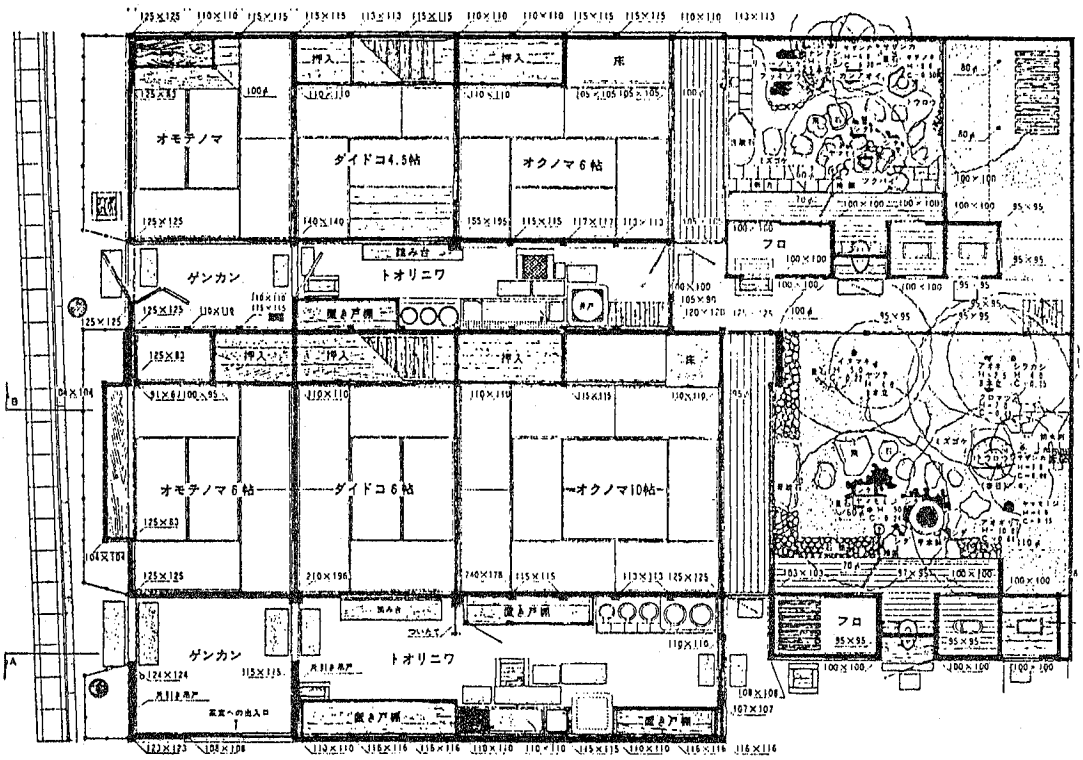
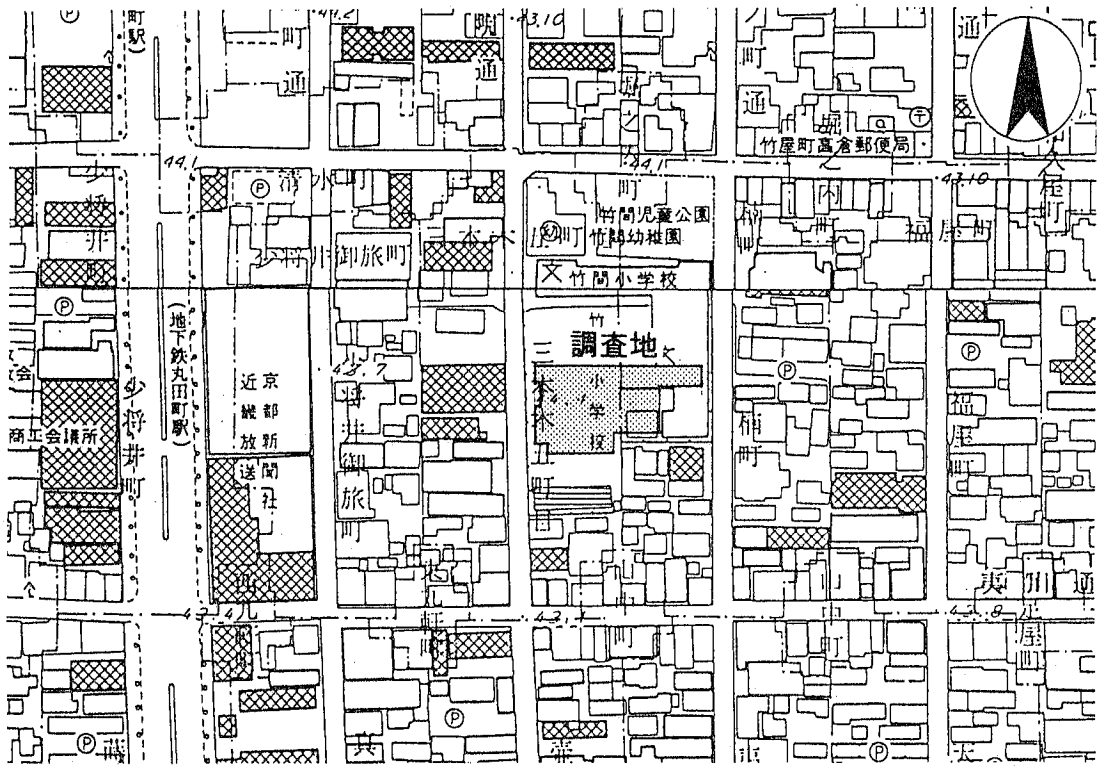


写真５　第１面町家５の穴蔵？（東から）



昭和時代の町家平面図
（島村昇・鈴鹿幸雄他『京の町家』　鹿島出版会　1971より）



調査位置図（１：2500）